

# ある仏教保育実践者のこころの軌跡

——先覚者九条武子に学ぶ——

佐賀枝夏文

## 第一章 仏教慈善への道程

九条武子（一八八七—一九二八）は浄土真宗の本願寺派二十一世大谷光尊（明如上人）<sup>1</sup>の二女として誕生した。幼児期は京都府師範学校付属幼稚園、同尋常高等小学校を卒業したのち、家庭教師に就いて教育を受け、高い教養を身につけて成人した。武子二十二歳のとき、兄光瑞の室、籌子の弟九条良致と結婚し、同年夫の留学に同伴してインドからイギリスに渡った。ロンドン滞在中に宗教教育にもとづく女子教育や慈善事業などの施設を視察したのち帰国している。このときの見聞と経験は、その後の武子が全身全霊をかけむけた実践活動に大きな影響を与えたと考えられる。

武子は九条家に嫁ぎ、夫良致の華々しいイギリス留学で新婚時代がはじまり、まさに順風に乗ったかにみえた。しかし良致ひとりがいギリスに残り、武子は翌年帰国し、それ以降は夫の帰りをひたすら待ち続ける日々を過ごさなければならなかった。夫の良致は実に十年の滞英期間を経過した後、武子のもとに戻っている。夫の帰国後、ようやく訪れた平和な家庭生活を東京、築地本願寺で過ごしていた。しかし安泰な生活がはじまったかにみえたが長くは続かなかった。武子は築地本願寺時代の<sup>2</sup>一九二三（大正十二年）に関東大震災に遭遇し、自らも被災し、生活資財のすべてを一瞬にして失ってしまった。

この被災体験をひとつの契機として武子は、慈善救済事業に身を投じていくことになる。大震災の直後から武子は築地本願寺を救災事務所として、全国本願寺派同朋に呼びかけて「罹災児童愛護袋」を募り、子どもたちの救援活動をはじめた。これらの活動は「あそか病院」、東京真宗婦人会の事業として設立した「六華園」の創設へと結実している。また、女子教誨、免囚保護事業にも尽力した足跡が残っている。

武子の生涯は十六才にして父光尊と死別し、そして、のちの結婚生活も夫良致のロンドンからの帰国を十年間待ちつづけなければならないものであった。時代は日露戦争、関東大震災、そして明治から大正へと世相も価値観も目まぐるしく変わる時代であった。そして、人生半ばにして「敗血病」を患い、四十一年の短い生涯を過ごしている。このように武子の生涯は決して安泰なものではなかったが、人生の出会いと別れを体験するなかで、運命に翻弄されることなく、宗教的自覚とでもいえる境地を獲得したといえる生涯であった。そこから生まれた「ことば」や「行動」が結びついて、社会的実践となり慈善事業や教化活動になっている。

加筆するまでもなく、武子は歌人として著名であり、『金鈴』『薰染』『白孔雀』『無憂華』や雑誌などに千四百余首<sup>3</sup>が収められている。武子の優れた感性やものの考え方は作歌の過程でより深められ、作風として作品に表現されているが、それは作品だけでなく同時に社会や時代をとらえる鋭い感性としても育まれ、また、信仰者としての生き方に見事に反映している。

## 第二章 九条武子と関東大震災

関東大震災は伊豆大島の北端千ヶ崎の相模湾底で発生し、地震の強さは震度六、地震の大きさはマグニチュード七・九であった。激震は関東地方を直撃し、大震災が未曾有の災害へと拡大したのは、東京市内一三四ヶ所、郡部四四ヶ所の出火の発生によると考えられている。大震災は日本の経済や社会をも大きく揺さぶり、未成熟だった資本主義に勢い

をつけて軍国主義、金融恐慌時代へと突入させる機動力となった。これを契機に「持てる者」と「持たない者」、資本家と労働者が両極に別れた分岐点でもある。当然のごとく「ひずみ」が生まれ、大震災を契機に金融恐慌のあらしがおきている。

ちなみに明治期にはじまった慈善の流れは、慈恵、博愛などの名称のもとに盛んに行われてきたのであるが、このころを境として社会事業へと成長を遂げた。この時代の分岐点に武子が活躍したことも、社会福祉の歴史からみると見逃せない重要事項である。

### 第一節 「喪失体験」と書簡

武子は関東大震災を築地本願寺で被災している。築地本願寺は地震では倒壊は免れたものの、その後の火災で焼失した。大震災は家屋の倒壊と火災が重なり、多くの犠牲者を出した。武子は多くの被災者と共にあてのない彷徨の末、着の身着のままの姿で、命だけは取り止めたという状態であった。

大震災の体験は武子の「何か」を変えた。これは武子の大震災以降の生き方に軌跡が残っている。着目にあたいるのは、武子が大震災の惨状から学んだのは、なくした財産や思ひ出の品々への未練や執着心を見事に断ち切って、「更生」の生き方であった。喪失体験は一般的に語ることはできないが、悲嘆にはじまり、混乱をくり返しながら、時間を経過するといわれている。あるひとの場合は運命を恨み、人生に落胆し、「ままならない人生」を不本意と思い、生涯を閉じることもある。また、時間の経過の助けを借りて体験を薄めていく場合もある。武子は短期間のうちに、ある結論に達している。「転身」ともいえるような宗教的自覚にいたり、不惜身命ともいえる実践家となった。

『書簡』のなかに喪失体験を通して実践家へと変遷の、こころの軌跡をたどることができる。この喪失体験の軌跡は、三通の書簡にみることができる。

関東大震災の当日……一九二三（大正十二）年九月 一日	
第一便……………	同 年九月 八日
第二便……………	同 年九月十四日
第三便……………	同 年九月十七日

第一便は大震災から一週間後、小康を得て無事を知らせる書簡で、文面に武子自身の被災の様子が読み取れる。文中の「……不思議にあたらしい詠草が二冊入れて御座いました。自分はいれたことは覚えないので御座いました。……」と、大震災の当日の動揺した様子が読み取れる。一連の書簡の三篇を比較してみると、第一便のなかには告白のようなものがなく、冷静な文体で、急いで安否を知らせる程度のものである。この冷静な文体の中で、あえて読み取るなら、事態を客観的に、少し距離をおいているようにも読み取ることができる。そうだとすると、物事を客観的にとらえ、衝撃から自らを防御しようとする「こころのメカニズム」<sup>4</sup>が働いているとも考えられる。

第二便「罹災後はじめての便り」は文体も先のものとことなり、心情が素直に叙述されており、ことにつづられた文章の中に、武子のこころを読み取ることができる。第二便のなかで「……もうあの後、かれこれ十日餘にもなりますのに、夢を見ている様で、暑さも寒さも、時候さへ何が何やらわかりませず、まして行先のことなど、ほんとに暗い様。こんな心ぼそいことは御座いませぬ。三十五年間の物質は、全部焼きつくしましたから、これからは更生のつもりで、私もよっぽど心を入れかへねばならぬと思うております。……」と武子が、書きつづっている。一便、二便は「ショック期」につづられたものであるとも考えられる。一便では「離人症」的な防御反応ともいえる「構え」が文体にあったが、二便では「構え」が消えたように思える。反対に生々しい「こころの風景」が描写されている。

長文の第三便の『書簡』で、悲嘆、混乱、苦悶と戦いながら、こころを整えていく過程を読み取ることができる。一

便と二便とも趣をことにした三便は、実に長い文章でつづられている。武子が断ち難い執着心から、脱却していく「ころの変遷」が述懐されているように思う。第一便が実にたんと事実と儀礼的な礼状におわっていたのたいして、第二便は生々しい体験「寒いやら、暑いやら……」を吐露し、第三便は実に丹念に大震災の様子と心象を描写し、締めくくりに「更生」のなみなみならない決意が述べられている。この長文は、宛名の小西夫人を相手に武子自身のころをつづったものであると考えることができる。言い換えるならば、武子が白紙の便箋に自在にころのすべてを語りかけた表現であると考えることができる。つぎることのないころの動揺を吐露し、述懐したものといえるであろう。

武子にとって、大震災でもっとも衝撃を受けたのは、大東京が火に包まれ、塵芥のごとく失われる人間の生命を目の当たりにしたことであった。「大丈夫」とするべきものが物質文明ではなく、する世界はただ阿弥陀の世界であることに気づく契機となった。第三便の結びに「更生」して生きたいという決意は、物質文明の世界から阿弥陀の世界への開示とも言えるであろう。

## 第二節 「阿弥陀の世界」の開示

武子が震災に遭遇しなければ、歌人武子の名声もこれ程までに後世に残らなかったであろう。大震災以降に書き残されたものには、武子が苦悩の末にたどり着いた新しい境地ともいえる「ころの安らぎ」が読み取れる。いうならば、阿弥陀さまに抱かれた嬰兒のような絶対的な信頼をよせて生きる、迷いのない態度ともいうべきものである。『無憂華』の行間からは、武子が懸命に、ひたすら無心に阿弥陀の世界を見つづけていることが伝わってくる。一瞬たりとも阿弥陀の世界から、よそ見をしないで生きる決意のようなものが随所に散見される。

喪失の体験は一般的には、なくしたもののへの執着や愛着から、喪失感としてさみしさや悲しみを伴うものである。合理的に考えてころを癒そうとすると、喪失感を埋めるような作用が働くのが普通である。ある場合には「代償」を求

めることで癒そうとしたり、またある場合には問題を直視しないで「迂回」して問題の核心から回避を行うこともある。代償や迂回は人間の悲しい側面であり、このような一般的なことでは根本的に解決できない。武子は「代償」や「迂回」には人生を解く鍵はない、と何度も著作『無憂華』で書きつつっている。

極めて簡単な、しかし、実行が極めて困難なことであるが、人生のできごとすべての「事実」として正しく受け止めることこそ阿弥陀の世界への近道と考えたようである。「ままならない人生」「願いがかなわない人生」をも受容し、老病死を夢そらごとではなく事実として生きる覚悟が武子には重要だったようである。その覚悟をつい忘れがちになる自分自身への戒めを随想や歌にもり込んだ作品がある。

阿弥陀の世界が開示したあとの武子は、合理的な帳じりの合う世界を脱却し、菩薩行とも言える利他行へ目覚めていくことになる。慈善救済が我執や災いを避けるために、行われれば、それは仮面をかぶった「おぞましい行い」である。慈善救済が give and take ではなく、すべてを投入したときに開示する「こころの世界」が行為として実践されたものが、仏教慈善の原点である。まさに、武子の愚直に歩みつづけた姿は、仏教慈善の原点であるといえるだろう。

### 第三章 武子の宗教的自覚と実践理念

#### 第一節 悩みとの対峙

わたしたち人間には、それぞれの人生があり、悩みや不安もまたつきものであるといえる。悩みや不安に対してどのような姿勢と考え方を持つかということは、大切な課題である。このことについての、基本的な姿勢を持つことは人間として、また、実践者の資質として求められることのひとつである。保育者がひとりの人間として、共に生きる子どもたちから魅力ある存在と感じられるのは、悩みや不安についての、間違いのない姿勢を持っていることだろう。人間は誰でも、その人にそなわった資質と、のちに獲得する生き方で、悩みや不安について取り組むものである。

武子の随筆と歌が収められた著書『無憂華』の「悩みをみつめて」<sup>5</sup> なりに、わたしたちが人間として悩みや不安に対するべき「求められる姿」ということが述べられている。武子が人生の悩みや不安のなかで、苦悶し到達したところは難解なことではなく、生別、死別の悲しいできごとを夢そらごとと思わずに、全面的に受容することである、と語りかけている。問題から目をそらせば、限りなく問題は影となって追いかけてくるものであるという指摘は、このリアリティは実得的を得ている。人生を「ありのまま」寸分変わらず、受け入れることは、実は阿弥陀の世界に抱かれた宗教的自覚から生まれたものである。

#### 悩みをみつめて

悩みからぬけ出でたと思つた人は、その日から寂しい日を送らねばならなかつた。

そしてそれは、眞實に悩みからぬけ出でたのではなく、たゞ悩みを逃避してゐることに氣づくのであつた。

悩みはつねに暗い影となつて、自分につきまとうてゐる。所詮、自分を滅してしまふほかに、悩みの影と別れることができないと覺るとき、悩みを全く拂ひ去らうとすることの、徒勞であることを知るのであつた。

光に近づいて、悩みを消してゆく。悩みをみつめてゆくものこそ、光によつて照らし出されてゐる自分を、ねんごろに育て上げることができる。

また、行間から読み取ることができることのなかに、わたしたちが悩みや不安で苦しんでいるのは、本当は悩みや不安の実態ではなくて、むしろ悩みや不安から、回避する方法をあれやこれやと悩んだり迷ったあげく、さらに悩みを大

きくしたり、つのらせたりしていることである。ことばを変えて言うなら自分自身が解決しようと懸命になればなるほど「とらわれの世界」に、自ら入り込むことになる、という明快な指摘である。

武子のことばのとおり、悩みや不安は自らの影であり、直視するところにこそ解決の方法があるというところを学びとることが大切である。わたしたちがこのことを自覚し、自らの生き方に生かすことができれば、仏教保育の実践者としての基本的姿勢を学ぶことになるだろう。

## 第二節 永遠に輝く、生命

わたしたちが仕事について考えると、労働や報酬などを「仕事」として結びつけがちである。近年、保育実践においても天職観が薄らぎ、教育労働や福祉労働として、考える風潮がある。しかし、わたしたちは保育実践ということばに限りない夢と期待をもって、実践へ向かう仕事観があるはずである。それは時代や社会のしくみが変わろうとも変わることはない「まことの仕事」観ともいうものでなければならぬ。武子が生涯を賭して学びとり、自らの生き方ともいうべきものを述懐したのが「減びざる仕事」である。

### 減びざる仕事

生命を打ちこんだ自分の仕事をもつてゐる人には、その仕事のどんな種類であるにかゝはらず、何人も尊敬せずにはをられない。たとへその一生に成し遂げ得ずとも、永遠にほろびることのない生命が、そこに見出される。

私たちは、ゆるされた短い生命を惜しまねばならぬ。しかし多くの人たちは、単に限られた生命の延長のみをねがひ、限りなき生命を育くむことを忘れがちである。千



古のをしへを垂れたいにしへの聖者たちや、藝道の上に不滅の光を放つた古人の努力をみるにつけても、短い生命を育て上げることの尊さが感じられる。

自分の生命を打ちこむことの出来る仕事を、もつてゐるものは幸福である。そこに如何なる苦難が押し寄せようと、たえざる感謝と新しき力のもとに生きてゆくことが出来る。

生命は仕事とともに不滅である。

武子のことばのとおり、わたしたちは限られた生命の延長を懸命に願ひ、そのことに執着するあまり、限りなき生命を育むことに気づかないで生きているのが普段の姿である。保育実践とは、生命を打ち込むに値する仕事であること、また限らない生命を育むことに値することの発見である。

合理的に生命を考えたとき、当然の帰結として「限りある生命」となる。しかし宗教的に生命をとらえたとき、その長さは物理的な長短ではなく、永遠を感じ得さえできることを武子は体験を通じて教示している。生命が輝くときは、物理的時空間を越えたときであると武子が語りかけている。

### 第三節 こどもの世界と宗教教育

わたしたち保育実践者が責任をもたなければならないことは、「保育」とは小さい大人をつくりだすことではない。大人のつくりあげた社会とは、実は熾烈な競争社会であり、そこを生きぬくための大人の価値観やものの見方をそのままもった子どもたちに押し付けることは間違いである。子どもたちのこころを如何に大切にできるか、また、共に生きる世界を実現することできるかといふことに重い責任を負うべきである。

武子の生きた大正、昭和初期は産業資本の蓄積・拡大期であり、競争原理が巧みにはたらく優勝劣敗の世相が定着しはじめたところであった。武子は阿弥陀の世界での絶対平等を主張し、現実社会の熾烈な競争社会に対して、警鐘を鳴らしつづけた。武子はこの点に関して、重大な関心を寄せており、それに関する随筆が数篇書かれている。そのなかのひとつが「こどもの世界」である。

### こどもの世界

むかしの「かしこい子供」とは、いはゆる「望遠鏡を逆にして見た大人」であった。小さな大人がたくさん造られて行く一方、児童の世界は無残にも滅ぼされてゆく。児童の王國をゆるさなかつたことは、過去の男子のみの世界に於ける、最も大きな罪の一であらう。

日曜學校はこの意味に於ても、極めて重い責任を荷つてゐるものと云つて差支へない。しかし従來の日曜學校が、現に教材方面に於てすら行詰つてゐることは事實である。然しながら私たちは、この悲しき事實によつて、そこにまた児童の心から出發し、清新な宗教々育の大道に出づべきことを教へられてゐる。

武子の文中の日曜學校を、仏教保育に置き換えると、わたしたちが本当に大切にしなければならないことが示されている。ことに大人たちが子どもたちを懸命に育てていることが、実は子どもたちの王国に土足で入り込み、子どもの王国を壊していることである。このような大人たちへの厳しい訴えは、時代を越えた「まことの声」として聞こえてくる

ようである。武子の生きた時代と違うが、現代社会が生み出したともいえる不登校、暴走、拒食・過食などの問題は、まさに子どもたちの王国へ大人たちが入り込んだ暴力への警鐘ではないだろうか。この解決の道は、対処療法や小手先だけの対策では用をなさないだろう。仏教にその道を訪ねるべきであろう。

#### 第四節 此岸から彼岸へ

武子のひたむきで懸命な実践の活動は、自己満足などのためではなかった。武子のひたむきな阿弥陀の世界への憧憬と、阿弥陀に抱かれているという安心感があったとみるべきであろう。だから、武子自身が輝き、武子の実践は輝いてたといえるであろう。

わたくしたちの行動が、give and take で成り立っているときには、それに見合う報酬がなく疲労感を伴ったり、中途で挫折してしまうものである。武子の行動は合理的には測ることのできない、別の世界が生きていたと考えられる。武子の生命現象が生物学的な存在でありつつ、宗教がそれを包摂したとき、パラドックスともいえる信仰の世界が開かれたのだろう。武子が「生きている」という立場から、武子は「生かされている」という立場へ展開したときに、すなわち此岸から彼岸が開示したのである。武子が次から次に押し寄せる試練を、生きることとは安楽なことではないが、試練に出会うことで阿弥陀の世界が、肌のぬくもりのように感じられたことを最大の喜びとして生きたのである。試練にあうたびに、こころの鎧を一枚つつ脱ぎ去り生きたようにもみえる。このなかから、我執を離れた愛ある行動が生まれたといえるであろう。この状態を慈悲といえることができる。ここに武子の願い続けた悲願ともいえる心の世界が『無憂華』のなかの「一如の愛」で語られている。

#### 一如の愛

純一なたましひの交換は、純一なたましひによつて始めて融合される。聖なるものは、たゞ聖なるものゝみが知る。このゆゑに尊い愛の世界は、愛し合ふものゝみが知る、平等にして差別なき一元の世界である。愛は何人にも惜しみなく與へられる。何人も愛し合ふことを許されてゐながら、何人も互に許し得ない、焦燥と苦惱の裡に閉ぢこめられてゐる呪はれた存在である。互に愛し合はうにも愛し得ない妄執の隔たりに、心をのゝかれずにはをられない。

さはあれ、他力救済の門は、自我の妄執になやめるものゝために開かれてゐる。他力の法門により、自利々他一如の愛なる苑生に出でざるかぎり、ながく排他鬭争の世界より、脱することは難しい。

武子が人生で出会つた最も大切なもののひとつは絶対他力の救済の教であつた。それはしだいに武子ひとりが独占してしまふ阿弥陀の世界ではなく、すべての人間を限なく包摂している、驚きともいえる開示であつた。誰ひとりとして、もれ落ちることなく包摂する阿弥陀の世界は、絶対平等であり同じともがらとしての同朋思想の開示へと深まつた。福祉が社会福祉と考えられるようになったのは、歴史の浅いことである。社会福祉が実現した社会は、ある意味では同朋思想の実現した社会であるといえるであらう。しかし「権利」として社会福祉を保障するという社会構造のシステムであれば、同朋思想とは根本的に違うものである。また、この社会が競争社会であるかぎり敗者は存在するが、その救済処置が福祉システムであれば、それも間違いであらう。武子につながる仏教福祉（保育）実践は、限なく包摂する阿弥陀の世界に「生かされた」同朋が躊躇することなく慈しみあうことを原点とするものでなければならぬ。

注

- 1 明如上人が二十一世を継承したのは、一八七一（明治四）年で、明治政府が神道国教化を推進し仏教を排斥した廃仏毀釈の時代であった。また明如上人は一九〇〇（明治三十三）年に大日本慈善会財団を設立している。
- 2 佐佐木信綱は『九条武子夫人書簡集』で、「青山高樹町時代」という時代区分をしているが、関東大震災に被災したのが築地本願寺であり、大震災の後の救援活動が築地本願寺で行ったことから、本稿では築地本願寺時代とした。
- 3 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第二十八巻一九二頁によると、重複八首を除いて計千二百二十四首あり、その他新聞や雑誌に二百余首がある。
- 4 「喪失体験」に関する研究は、中途障害者が障害を受容する過程の研究として多くの研究が行われている。大震災直後の、この時期は防衛機構が働き、一時的に健忘したものと考えるのが妥当である。
- 5 九条武子著『無憂華』実業之日本社、一九二七（昭和七）年七月八日十一頁
- 6 前掲書、九十五〜九十六頁
- 7 前掲書、四十二頁
- 8 前掲書、六十四頁

参考文献

- 九条武子著『無憂華』実業之日本社、一九二七年七月八日  
籠谷真智子著『九条武子』同朋舎出版、一九八八三月十日  
佐佐木信綱編『九条武子夫人書簡集』実業之日本社、一九二九年四月二十五日  
中山峯太郎著『九条武子夫人』大日本雄弁会講談社、一九三〇年一月十七日  
昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第二十八巻所収、「九条武子」一九六八（昭和四三）年  
中島陽一郎著『関東大震災』雄山閣、一九八二年七月五日